

平成25年度「重点研究費」研究成果報告書

研究課題	「現地主義」に基づくフィールドワークの応用地理教育的研究
------	------------------------------

研究代表者

氏名 中村 康子	所属 人文社会科学系人文科学講座 座地理学分野	職名 講師
-------------	-------------------------------	----------

研究分担者

氏名 牛垣 雄矢	所属 人文社会科学系人文科学講座 座地理学分野	職名 講師
椿 真智子	人文社会科学系人文科学講座 座地理学分野	教授
加賀美 雅弘	人文社会科学系人文科学講座 座地理学分野	教授
古田 悦造	人文社会科学系人文科学講座 座地理学分野	教授
上野 和彦	人文社会科学系人文科学講座 座地理学分野	特任教授

【研究成果の概要】 (文字の大きさ9ポイント・字数800字～1600字程度)

中等教育現場における地理履修率の低下は、学校教育現場全体の地理教育力の低下を招いているとの認識から、日本地理学会から「教員養成大学は少なくとも「地理」に付随して地域調査(フィールドワーク)を必修として課すべき」との提言がなされている。また、小学校社会科の地域事象の教材化に求められる教師の力量として、地域観察力とフィールドワーク技法があることに加え、教師自らのフィールドワークでの感動、授業実践における「現地主義」への転換が重要になることが指摘されてきた。

本学の地理学分野・地理学教室では、設立以来、「現地主義」を掲げ、フィールドワークに力点を置いた地理学教育を実践してきた。ただし、それは個々の教員がそれぞれの教育活動の中で実践してきたものであり、個々の教員が「現地主義」をどのように実践しているのかについて、共有してきたとは言えない。また、学生が現地主義に立つことができるという期待はあるものの、どのように現地主義に立てる人材育成につながるのかについて、深く議論したことはなかった。

こうした状況をふまえ、本研究では、まず、各教員が教育上実施しているフィールドワークの内容について、教員相互の参照ができることをめざした。具体的には、各教員が個別に実施してきたフィールドワーク(巡検、地域調査)を対象とし、地理的見方・考え方を成立させる基本要素をそれぞれが検討した。その上で、談話会を開いて、どのような段階を経て「現地主義」に立てるようになるのかを検討した。得られた成果は以下のとおりである。

1. いずれの報告でも、景観を読み解く能力をいかに育成するのかに力点が置かれ、景観から何をどう感じるができるのかが現地主義に立つ思考力と関わる点が指摘されていた。
2. 言葉にも社会的ルールに不自由のない国内でのフィールドワークと、言葉にも社会的ルールに不慣れな海外でのフィールドワークとでは、アプローチに違いがあった。キャンパス内をフィールドとした例も含むと、身近な地域・国内地域ではフィールドワークのスキルアップをめざそうとする傾向がみられた。また、海外では事前の学習をふまえたフィールドワークによって、日本では得難い経験を体得することに重点を置く傾向がみられた。
3. 単に現地に行くだけでは何も得られないという見解も一致している。地域に関するさまざまな分野の書物による学習、地理的技能・地理的味方・考え方を動員しての地誌書や地図での下調べ、社会構造への関心を高めるための日常的学びなどと、知識・教養と現地の実状との相互作用が重要であることが指摘できる。
4. フィールドワークには、諸段階があり、それらが結びついて現地主義に立てる人材が育成できると考えられた。地理学を専門とする学生は、スパイラルに修得できることが重要になり、他の学生については、部分部分を多面的に修得できることが重要になる。

(1193文字)

研究成果発表方法

[発表論文名（口頭発表を含む）、氏名、学会誌等名（投稿中・投稿予定・執筆中）を記入する。]
※本経費を用いて、報告書（冊子等）を作成した場合には、本様式とともに1部を提出すること。
なお、提出された報告書は教育実践研究推進本部を通じて附属図書館へ寄贈する。

報告書（冊子）。地理教育学会での発表予定。